

特集

網膜静脈閉塞症の最新のとらえ方

序 論

門之園一明*

今月号の特集は、“網膜静脈閉塞症の最新のとらえ方”です。この疾患は、実に不可解な要素を多く秘めています。もともと、血管閉塞症は全身に限なく生じる疾患ですが、そのほとんどが動脈閉塞です。静脈閉塞症は、胸郭症候群、下肢静脈血栓症、肺静脈閉塞症など極めて限られており、発症頻度は高くありません。しかし、網膜静脈閉塞症は異なります。眼球内では、静脈は頻繁に詰まり、重篤な視機能障害を生じるのです。その理由は、網膜静脈が視神経・網膜という非常に限られた容積の組織内を走行するゆえ、必然的に生じ得る疾患だからでしょう。もし、網膜静脈が網膜外をゆったりと走行していたら、病気は変わっていたかもしれません。ゆえに、網膜静脈閉塞症は、糖尿病網膜症に次いで多い網膜血管障害です。全身合併症との関係、緑内障との関連もある日常よく遭遇する疾患でもあります。

これまで、多くの研究者は眼底所見、蛍光眼底造影検査、自動視野計検査を応用して、さまざまな観点から本疾患を解析してきました。治療はどうでしょうか。網膜静脈閉塞症に対しては、従来内服治療、光凝固、ステロイドなどが主流であったと思います。また、硝子体手術も盛んに行われていました。しかし、近年抗 VEGF 薬の登場により、その治療内容や成績は様変わりしています。網膜静脈閉塞症のとらえ方が急速に変わりつつあるのです。

現在は、網膜静脈閉塞症のあたらしい理解の時代といえるでしょう。これをサポートする検査機器はいくつかあり、そのひとつが眼血流測定装置の進歩です。レーザースペックルフローグラフィは、本邦で開発された眼底血流測定機器ですが、本装置によりこれまで不明であった血流速度を詳細に観察することが可能になりました。また、OCT により本疾患による網膜病変をより詳細に観察することが可能になってきています。黄斑浮腫の形態、出血の程度や形、血管の走行による閉塞症の程度など、多くのことが理解されつつあります。また、OCT angiography (OCTA) は、黄斑部虚血の状態、特に、無灌流領域を明確にとらえることができます。網膜内の浅層と深層の層別比較を行うことが可能であり、FA で確認できなかったあたらしい知見を多く見ることができます。さらに、毛細血管瘤や血管拡張などの FA で従来不鮮明であった所見を、OCTA では極めて正確にとらえることが可能となります。また、網膜静脈閉塞症の薬物療法の時代にあって、これらの検査機器の進歩に伴い硝子体手術の役割も再認識されるようになりつつあります。

幸い本邦には、網膜静脈閉塞症の分野で近年目立った活躍をしている研究者が多くいます。本特集では、これらの気鋭の研究者の協力により、あたらしい手法を用い網膜静脈閉塞症を多角的にとらえることができました。網膜静脈閉塞症のあたらしい時代がきていることを実感していただけたと思います。

*Kazuaki KADONOSONO 横浜市立大学大学院医学研究科視覚再生外科学